

佳作

自然なふれあいがつくる共生社会

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

樽見 蒼空

小学生の頃、私のクラスには一つ上の学年に知的障害を持った男子がいました。彼に対して、周りの子どもたちは皆、まるで幼稚園児に話しかけるような優しい口調で接していました。その時の私は、その接し方が正しいものだと思い、同じように彼に対して優しく話しかけることを心がけていました。思いやりを持つことは大切であり、彼が安心して過ごせるようにと考えての行動でした。

しかし、年月が経ち、今になって振り返ると、私たちは彼を「障害者」という特別なカテゴリーに当てはめて見ていたのかもしれない。そのため、彼の本当の気持ちや個性を十分に理解しようとはしていなかったのではないかと感じるのです。彼はただ一人の人間であり、私たちと同じように感情や意見を持っています。しかし、私たちはそのことに気付かず、彼を「障害者」として捉えることで、彼の可能性を狭めてしまっていたのではないのでしょうか。

障害を持つ人々とのふれあいを通じて、私は大切なことを学びました。それは、特別扱いすることが必ずしも正しいわけではないということです。もちろん、彼らには支援や配慮が必要な場面もありますが、それ以上に重要なのは、自然な態度で接し、一人の人間として尊重することです。障害を持つかどうかに関係なく、対等な関係を築くことが、真のふれあいを生み出すのだと思います。

社会全体が障害者に対して特別な扱いをすることで、かえって彼らを孤立させてしまうことがあります。私たちが彼らを「特別な存在」として捉える限り、彼らもまた、自分自身を特別な存在として感じるようになり、社会との距離が広がってしまうのではないかと危惧しています。

私が目指すのは、障害者に対するマイナスなイメージや偏見を少しでも減らし、彼らが社会の一員として自然に受け入れられるような環境をつくることです。私たち一人ひとりが障害を持つ人々に対して自然な態度で接し、彼らの個性を尊重することが、真の共生社会を実現するための第一歩であると信じています。

また、私たち自身も、障害を持つ人々とのふれあいを通じて、多くのことを学ぶことができると思います。彼らの持つ強さや優しさ、そして困難に立ち向かう姿勢は、私たちにとって大きな刺激となり、成長の機会を与えてくれるはずです。共に生きる社会の中で、お互いに理解し合い、支え合うことで、私たちの生活は豊かになるでしょう。

最後に、私は障害者もそうでない人も共に生きやすい社会をつくりたいと強く願っています。心のふれあいが広がり、お互いに理解し合える社会こそが、真の共生社会であり、それを実現するためには、私たち一人ひとりの意識と行動が不可欠です。小さな一歩かもしれませんが、私はこれからも、障害を持つ人々と自然な形でふれあい、共に生きることの大切さを伝えていきたいと思っています。